

詩人萩原朔太郎 熊本の足跡

文学・歴史館 企画展始まる



萩原朔太郎の五高時代の直筆のはがきなどが並ぶ企画展
＝熊本市中央区

「日本近代詩の父」と称される詩人萩原朔太郎（1886～1942年）と熊本の関わりをたどる企画展「煩悶と運命―朔太郎と熊本のゆかり―」が14日、熊本市中心区のくまもと文学・歴史館で始まった。同館と県立図書館主催。12月5日まで。

朔太郎の没後80年にあたり全国で実施されている企

画展の一環。群馬県の開業医の長男として生まれた朔太郎は、20歳で第五高等学校（現熊本大）英語文科に入学したが進級できず退学し、1年で熊本を離れた。その後、「月に吠える」「青猫」などの詩集を発表し、話し言葉で表現する「口語自由詩」を確立した。

同歴史館の企画展では、五高時代に家族や親戚に宛

てた直筆のはがきや制服のボタン、詩人になってからの直筆詩稿など48点を展示。はがきには水前寺公園や日奈久温泉などを訪れた青春のエピソードがある一方で、将来の進路に悩んでいた様子も書かれており、若き日の葛藤が読み取れる。交流があった詩人北原白秋らの展示もある。

11月6日には県立図書館で岩本晃代・崇城大教授による講演会、同19日には詩人の伊藤比呂美さんと四元康祐さんによる対談がある。いずれも事前申し込みが必要で先着50人。参加無料。くまもと文学・歴史館
☎096（384）5000。
（前田晃志）